
世界樹と精霊

チエルシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界樹と精霊

【著者名】

チヨルシー

N6586T

【あらすじ】

長い間人間と関わらず、沈黙を守り続けた《精霊》にある出会いが訪れる。そして……

プロローグ

地球が有るこの世界とは別の世界、……異世界。

その異世界で一番広い森【初まりの森】の丁度真ん中に【世界樹】と人々に呼ばれ、神聖視されている巨大な木が存在している。

その木の大きさは、直径約5メートル・高さ約75メートル。その木の周辺に生えている木もそこいらの木とは比べ物にならないほど立派なものだが、この【世界樹】は別格。

普通の木では有り得ない程の凄まじい存在感を周囲に放っている。

そして、大きさだけでなく、姿も他の木と比べ物にならない程の美しさだ。

長い時を生きてきたであろう幹は、ザラザラとしている他の木とは違い、滑らかで、明るい茶色をしている。滑らかと言つても、さるすべりと言つ木とは違い、皮がむけているように見える訳ではない。

その木には淡い燐光を放つ若草色の葉が木の枝をしつかりと覆つており、その葉と葉の間から漏れる光が、野に咲き乱れる野花達を優しく照らしている。

そんな木のすぐ隣には、世界一の透明度を誇る湖【リーティア湖】が太陽の光を反射して、キラキラと輝いている。

世界の名だたる芸術家達が『見なければ死んでも死にきれない』と

言わしめるほどの風景が広がるこの場所は、芸術家で無くとも『死ぬまでには一度見てみたい』と人々が言う神秘の場所。

しかし、この場に近づく事は困難を極める。

森の中に有るからという訳ではない。

【世界樹】を中心とした半径30キロに結界が張られているためだ。

この結界、【世界樹】がこの地に芽吹いた時から宿っている《精靈》の様な存在が結界を張っている。

言つてしまえば、この【世界樹】だが、根元から木の中に入れる様になつてゐる場所が有り、その中に守られるようにして有る《木の核》とも言える宝石が有り、そこに《精靈》の様な存在が宿つている。

その、核とも言える宝石に宿つた《精靈の力》で【世界樹】を始めた【初まりの森】は保つてゐる。

この宝石がこの森から持ち出されてしまつた場合、この【世界樹】中心にどんどんと枯れて行つてしまつ。森に流れる川や、森の周辺に有る地下水源も枯れ果てる。

【初まりの森】が枯れてしまつたら、この森を糧に生活していた人間達は死。

【初まりの森】が有るからこそ、国が多く存在しているこの世界では、森の死は、人々の死へと直結する。

しかし、この《精靈が宿る宝石》は、人間で知る者は居ない。

知られなくても、この世界の生き物たちを裏から支える《精靈》は存在している。

そして、《精靈》の力の影響で、【世界樹】の周囲に生息している野生の生き物たちにはいろいろな変化が起きたモノ達が居る。その動物達には自我が有り【世界樹】の《精靈》に付き従っている。

やはり、この事も人間で知っている者は居ない。

『平和だね～』

ちなみにこの透き通るような声が【世界樹】の《精靈》の声だ。

この精靈にもしっかりと自我が存在している。

しかも、昼夜好き。

気付いたら数年間寝ていた、なんて事がざるに有る困った《精靈》だ。下手すると数十年眠っている事もある。

性別的に言つと女性。人型にも成れるらしいが、必要になる事がまず無いので、見たモノは居ないらしい。

『そうだね』『そう? 今日は鳥達が飛びまわっているから騒がしい』『そろそろ産卵の時季だからだよ』『そうだっけ?』『うん。今鳥達は巣を作つていいんだよ』『そつか』『そんなんだ』『多分ね』『……多分ねって』『長生きしていると時間の経過が分からなくなつてくるんだもん』『それもそうね』『それには賛同』『気にし

たら負け》 《それにも賛同》

この響くような声は、長年《精霊の力》の中心地で生きてきた事により、自我を持つた木達だ。

様々な木達は、良くなうした会話を《精霊》としている。

逆に言えば、木達とその他の例外しか話し相手が居ないのだ《精霊》には。

たまに人間がこの森の中へ入つて来る事もあるが、その人間達の前では絶対に声を出さない。

他の木達も同様に。

ちなみに、何故結界が有るのに人間が入れるのかと言うと、この森に入るには《条件》が有るのだ。

この条件は一つしかなく、簡単に言えばこの条件を満たしていれば誰でも結界を通り抜けられる。

その条件は『結界内に入るのを意識しない事』だ。

大抵悪い事目的で入つて来る人間は、目的がある訳だから《森に入る》と言つ事意識しない様にしても、してしまつものだ。

だから、邪まな思惑で入ろうとする者は、決して入れない。

入つて来る人間は大抵「入るつもりはなかつたが、いつの間にか入つていた」と言う人間ばかりだ。

それでも、この森の存在を知らない人間は、この森の周辺に有る国で知らない者は居ないので、人間が入つてくるのは1年に1回入つてくるか来ないか位だ。

だからこそ、この森は平和が保たれている。

そして、この広大な森【世界樹】を含めた全ての【母】とも言える《精靈》

もう、大昔から存在し、長い間沈黙を守り続けていたこの《精靈》に有る【2人の人間】との出会いが訪れる。

《精靈》が人々に知られる存在となる出会いが。

『平和すぎて眠いから、少しの間寝るね。何かあつたらよろしく』

『また寝るの?』『寝るの?』『せつかく起きたばかりなのに』『いつ起きたんだっけ?』『……4日前?』『そうだっけ?』『多分』『また多分?』『別に何年寝ても何も変わり映えしないんだし良いんじゃない?』『そう言つもん?』『そんなもん』『そつかうだね』『ふふふふふ』『ははははは』

木々達の笑い声を聞きながら《精靈》は、また長い眠りに落ちる。

次に目覚めた時、起きる出来事を知りもせずに。

第一話 田覚めたり…（前書き）

自分の浮氣性！

治せないものか…

次々と新しい話を書きたくないって、書いてしまつ…

直せないものだらうか…

第一話 田覚めたら

『……人……』『……赤……血?……』『どう……』『精れ……おこ』『でも……かな?』『わ……無い……』『ど……しよ……か』『別に……へき……じゃ……』『人……も……いよ』『早……いと』『で』『どうし……』

森の木々達がざわめいている。

所々聞こえていた木々達の声に、何だろうと、眠っていた『精靈』は意識を覚醒させる。

すると精靈が起きた事に気付いた木々達は、何処となく慌てた様子で、一斉に『精靈』『だけ』に向かって話し出す。

『よかつた!』『起きたんだ』『ねえねえ』『人間だよ』
『久しぶりに、人間がここまで來た』『でもあの人間、沢山赤い液体が体から出てる』『確か血つて言うんだよね?』『私達にとつて樹液的なやつでしょ?』『しかもなんだか苦しそう』『こうゆう時つてどうするの?』『助ける?』『治す?』『どうやって?』『どうしよう?』『だから大丈夫じゃない?』『人間は脆いってさつきから言つてるじやん』『でも』『どうしよう?』『このまだと死んじゃう?』『うーん』『多分?』『そんな事言つてる場合?』『さあ?』『どうしよう?』『少し落ち着け』『でも』『お前、でもばっかだな』

色々関係無い事を省いて、分かりやすく言つていいのだ。

人間が来ていて、しかもけつこうつな怪我をしてこるらしい。

取りあえず、その人間は何処に居るのかと《精霊》は当たりの気配を探ると【世界樹】の根元に居る事が分かり、その場所を見てみる。

「…………くうつ…………」

そこには、苦しそうに息をしている青年が、倒れこむよつてして【世界樹】に寄りかかっていた。

本当は綺麗だらう群青色の髪は血と泥にまみれ、瞳の色は闇じられていで分からぬ。

苦痛のために歪んでいる顔も、髪と同じよつて血と泥で汚れているため、良く分からぬ。

そして、分かるのはその腹部に、かなり大きい獸か魔物にやられたのが分かる、大きな三本の引っ搔き傷が有る事だ。

服の上からぞりくじやられたのだらうの傷は、かなり深く、赤い血がドクドクと流れ続けている。

早く血を止めなければ命にかかる。

『これはまちよつと危ないわ』

《精霊》は厳しご声で告げる。

『ちよつとつて?』『どのくらい?』『死んじやう?』『結構出てるし…』『何が?』『血』『顔真つ青だし?』『うん』『死んじや

木々達の声に苦笑する様に少し声をもらし、ちょっと困ったような声で言づ。

『治すと言つても、私は人間を治療した事が無いの』

その言葉を聞いた木々達は、それなら平氣だと黙り出でます。

『口ウとかと同じ様にすれば良いんぢやない?』 『形が違くても、中身は同じでしょ?』 『血つて言つんだつけ?』 『口ウ達も同じ』 『そう言えばそうだ』 『口ウ達の一族なら治療した事有つたでしょ』 『あつたつけ?』 『結構前だけあつたよ』

木々達が口々に言つてゐる口ウと言つのは【世界樹】の影響で、他の動物達や魔獸達とは違う進化を果たした、この世界では神獸と言われる者たちの中の一族の一つ。

【ボルトウルフ】一族の長である。

この一族は、この森隅々までの監視を行つてゐる一族であり、今現在は一族総出でなければ間に合わない程の事態が起き、森を空けている。

『精靈』が眠りに落ちてゐる時、そう伝言を残してゐたのだ。詳しい状況の報告とともに。

『……じゃあいけるかしら?』

でも“この力”人間には強すぎると思つのよね……人型になれば、力のいくらかは抑えられるかな?』

『精霊』がそのままつた時には【世界樹】が眩い光を放つ。

そして、その光が収まつた時には【世界樹】前に、美しい女性が立つていた

歳は、見た目で三十五歳くらい。体の線は全体的に細いが、胸はたわわに実つていて、腰も世間の女性達が羨ましがるだらうほど細い。

透き通るような肌は、乳白色している。光の当たる角度によつて色を変えキラキラと輝く真つ白な髪は地面にとどけやうなほど長い。

そして、顔は見た者は皆、女神だと勘違つてしまつたうなほど整つてゐる。瞳の色は琥珀色。

この琥珀色は『精霊の宝石』と同じ色である。

その姿は神々しく、威厳に満ちておつ、森の女王とも言はれるのではないだろうか。

木々達が『初めて見た』と言つてゐるのを氣にも止めず、『精霊』は、その青年の近くまで近づいて行く。

歩いて近づくのではなく、空中を滑るよつて近づいて行く。足は地面に付いていない。

そして、青年のすぐ隣までやつてくると、傷の上に手をがさす。

『これでいいのかしら？』

そうポツリと呟いた次の瞬間、かざした手が光り始める。

そしてその光は、傷を柔らかく包み込む。

少しすると、傷から流れ続けていた血が止まり、傷がピンク色になる所まで回復する。

苦しげだった青年の顔も、穏やかなものとなり、荒く乱れていた呼吸も規制正しくなった。

そこまですると《精霊》は力を注ぐのをやめる。

『これ以上は逆に良くないわ。

流石に、流れてしまつた血を戻せる訳ではないから、少し休ませてあげましょう。

体力さえ戻ればなんとかなるわ』

『良かつた』 『止まつた』 『樹液？』 『違うよ、血だよ』
『治つた？』 『多分』 『多分？』 『このまま田を覚まさなかつたら』 『そんなの有り？』 『有り』 『…て言うか』 『何？』 『何い？』 『何でこの人怪我してたんだろう？』 『そりや…襲われたから？』 『誰に？』 『誰つて言うか…獸か魔獸』
『多分魔獸だよ』 『この辺りは魔獸多いからね』 『でもこの人かなり強いよ。だから獸では無いと思うし、魔獸でも結構強い奴じゃないと、こんなにはやられないと思う』

何か知つてゐる様に呟く、一本の木に向かつて《精霊》は問いかけ

る。

『「」の人の事知っているの?』

『ううん、知らないよ。

でも仲の良い小鳥が良く話してくれるんだ。最近若い人間で、凄い珍しく強いのが居るよって。

その小鳥は、人間達の国に良く行つて、色々な事を見て来るのが好きなんだ。

その小鳥が言つてた若い人間の特徴がその人に似てる。多分だけど間違いないよ』

『……じゃあ、ロウ達が討伐に行つた亞種の魔獸に関係が有るのかしら?』

『なあに?』『どうかした?』

『いえ、何でもない』

最後に『精靈』が小さな声でポツリと言つたこの言葉、聞こえたモノはいなかつたようだ。

そして、『精靈』が何か青年の様子の違和感に気付いた様で、青年の額に触れる。すると少し驚いた様に言つ。

『この人、少し熱が有るみたい』

『熱?』『えっと、そう言つ時は…』『やつぱ冷やす?』『そうだね』『お水!お水!』『と言つた、水飲ませた方が良いんじゃない?』『確かにそうだね』『でも意識ないよ』『…

無理やり?》 《ねじ込む》 《そんな言葉どいで覚えた》 《前に来た人間の言葉の中》 《……》

その後も、木々達の騒がしい声を聞きながら《精霊》は、青年の看病するのであった。

第一話 初めて・・・

「…………」

そつ呻き声を上げて青年は眼を覚ました。

ぐらぐらと揺れる頭をこじりえて、自分が居たらしい六から顔を出し、青年は周囲を見回す。

田の前に映るのは今までで見た事とない程美しい湖、一本一本が今まで見た木より一回りは大きい木々。

そして、その大地には見た事の無い美しい野花が咲き誇っていた。

風に吹かれて揺れる一つ一つの野花や木々瑞々しい葉が、光を反射して輝いている。

どことなく神聖な雰囲気が漂う場所を田の当たりにした青年は驚きで眼を見開き呆然となる。

「…………！」

何処だ？

そつ思つた瞬間、意識を失う前に自分に起つた事が頭の中によみがえる。

青年は、最近現れ村や町を荒し回つてゐる魔獸を討伐するための任務に参加していた。

今回の魔獸は何かしらで変異を起した亞種、しかもこの変異した亞種はかなりの数の魔獸を引きつれており、しかもこれがかなりの強さらしく、その地域の衛兵では数的にも、強さ的にも歯が立たず『被害が広がる前に即急に対処を』との事で、軍の中でも飛び抜け優秀な者が集められ、一時的に討伐部隊が作られた。

青年は最年少で選ばれた。

青年は、軍の中でも上位の戦闘力を誇り、この若さでこんなにも強いのだから将来が楽しみだと言っていた。

青年は言われている事に気付いていないが。

そして青年を含む討伐部隊は、村を襲つていた魔獸達をあらかたかたずけた後、討伐部隊は頭で有る亞種を探すため、数が多く、斃しきれなかつた魔獸十数匹が逃げ込んだ森の中に入った。

逃げて行つた魔獸は、同じ方向を目指しているようであり、この先に亞種が居ると確信した部隊は痕跡を追つて森の中を奥深くまで入

つて行つた。

そして亞種の魔獸を見つけた。

しかし、その周りには魔獸が数匹いるだけで、逃げて行つた魔獸とあの場所にはいなかつた魔獸達がかなり居ると思つていた隊員達は少し戸惑い気味だつたが、斃すことには変わりがなく、頭を切り替えると戦闘を始めた。

先鋭とも言える部隊と言う事と数が少なかつた事も有り、意外なほどあつさりと勝負がついた。

亞種との戦いは、さすがにしてこずると部隊の者全員が思つていたが、何故か亞種は弱つていた。

そのおかげであつさり勝負がついたのだ。

色々な疑問が残る事になつたが、取りあえず王都に帰還と言う事になり来た道を戻ろうした時、殺し切れていなかつたらしい魔獸が飛びかかつて來た。

普通だつたらあつさり返り討ちに出来たのだろうが、魔獸が飛びかかつた者は隊の者ではあるが戦える者では無かつた。

軍医だつたのだ。

単独で動く任務を請け負つた部隊には数人の軍医が付く事が多い。

今回の討伐部隊も例外ではなく2人の軍医が付いて來ていた。

もう殲滅したと思っていたため、隠れていた軍医も出て来ていたのだ。

青年はとつた軍医をに庇つた。

その勢いで魔獸と共に流れの速い川に落ちたのだ。

丁度前日に激しい雨が降っていた事も有り、元から水量が多く、流れの速い川はますます水量が多くなり流れの速さも速くなつていた。

冷たい水の感触と薄れる意識……そしてあたりが真つ暗になる。

眼を醒ましたのはどこか流れ着いた場所。

体はまだ下半身は川の中だ。ざつくつと魔獸にやられた傷からは血がどんどん川の水にさらわれていく。

痛みと血が足りないせいか、視点も定まらない。

力の入らない手足を無理やり動かし、這つて行つた。

何処に行こうとか、移動しようとか思つた訳では無かつた。

だが、此のままではまづいと頭のすみで警鐘がなつていた。

無意識にその警鐘に従い5メートルほど移動した所で青年は力尽き、手足をピクリとも動かせなくなり自分は死ぬのだと分かつた。

血はいまだに流れ続け、顔は真っ青。

生きているのが不思議なほどの中症だ。

意識は朦朧とし、周囲は霧がかつた様にしか見えず動いているのか居ないのかが分かる程度。

不思議と青年の心には恐怖心は無かつた。

受け入れようと。

自分の死を。

そう思つていた。

眼を開け続ける事も出来ず、眼を閉じた。

闇に包まれ、もういいと。

そんな時、

目の前に光が現れた。

光の正体は分からぬ。

しかし優しいその光は優しく青年を包み込んだ。

小さい頃母に抱かれて眠った時の不思議な安心感を覚え、青年は意識を手放した。

「……思い出した」

あの時青年は死ぬはずだった。

上位の治癒魔法を使える医者で無ければ助からなかつたであらう傷だつたのだ。

とつたに青年は傷が有るであらう場所を見る。

「……ツー？」

傷は跡こそ少しは残るだろうが、塞がつていた。

あんなにもは深かつた傷だといつた。

「どう……いう事だ……？」

何が何だか分からなくなり、混乱している所に行き成り澄んだ声がかかる。

『あら？ 眼が覚めたのね』

「誰だつゝ！」

突然の事に、とつたに真横に置いてあつた自分の剣をつかみ声のした方に振り向きざまに構える。

『ふふふ、大丈夫よ何も悪い事はしないわ』

青年は息をするのを忘れたかのように呆然とと固まつた。

『ねえ、貴方の名前を私に教えてくれない？』

これが、人間と《精靈》との初めて邂逅^{かいじゅう}。

十年後には世界最強と呼ばれるようになる青年と世界の中心で生きるモノすべて支え続ける《精靈》との出会いであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6586t/>

世界樹と精霊

2011年8月10日02時51分発行